# 白堊の魚、侏羅の鳥。

まいまい?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白堊の魚、侏羅の鳥。

【Ｎコード】
Ｎ９７９２Ｑ

【作者名】
まいまい？

【あらすじ】
飛鳥の家には、他の人には見ることができない白狐のハクアがいる。
雨模様が続くある夏 、飛鳥の家にいとこの泳魚がやってくる。
そのいとこもまた、ハクアの姿を見ることができた。
湿った空気の匂いが漂う夏の盆、夢と現の挟間にある話。

## 一・天井で揺れる木目は

湿った空気は、ほのかな露の香りがする。
視線の先には木製の天井があり、無数の木目が波紋のように円を描いていた。それと重なるように光の反射したものが、その天井で水面のように波打ち揺れていた。
まるで、水の底に沈んでいるようじゃないか。夢の続きのような風景は完全な覚醒を妨げている。
夢か現実か。水中に揺れていた、細く凍ったような白い腕。あの体温が全く感じられない冷えた柔らかな手。いつもつかめないでいる彼の??虚をつかんだような、あの指の間の感触が蘇る。

目覚めたばかりで、気だるい意識の飛鳥は窓のほうに顔を向けた。窓は開いている。その湿った空気の匂いが部屋に充満していたのは、そのせいだろう。
窓にかかった白い布が風を受け、からから波打っている。時折見せる布の隙間からは光の筋が漏れていた。その光は黄色に淡く、まだ朝の色を濃く残していた。

飛鳥はもう一度寝ようと寝返りを打つ。しかし、この重々しい湿った空気が気に入らなかった。飛鳥は起きだした。
彼は窓の下の畳を手で触れて安心する。部屋は濡れていなかった。昨夜から開いていたわけではなさそうだ。
飛鳥は窓の外を見る。灰色の雲間から何本もの太陽の光が地面を突き刺して、天を支えていた。ここ数日、雨が降り続き、外で遊べぬ日が続いたのだ。雨の多い夏、長い梅雨の夏だった。もう盆も始まろうとしているのに、空が青色の日を数えたほうが早かった。

「今日はまあまあな天気かな」

しかし真夏の日差しは厚い雲の上になりそうだ、とはいうものの、雨よりは晴れているほうが断然良かった。飛鳥は天気によって気分が変わる性分だった。晴れていれば何も濡れないのだ。

窓のほうから目を離し、再び部屋の中を見る。彼の寝ていた場所の隣には畳まれた布団があった。

「兄ちゃんは、早起きさんなんだね」

兄と言っても血のつながった兄弟ではなく、従兄弟である。夏休みと言うことで遊びに来ていたのだ。

飛鳥は自分に従兄がいるなんて、今年になるまで知らなかった。従兄は飛鳥よりも年が上で、飛鳥のことを昔から知っていたようだ。しかし、飛鳥には彼との記憶はなかった。おそらくずっと小さい頃に会ったことがある程度なのだろう。

飛鳥には兄弟がいないこともあり、嬉しさもあって「兄ちゃん」と呼んでいた。従兄の名前は「泳魚」と言う。「ボクは飛鳥だから、似たような名前だ」と、その時は思った。

めずらしい名前で覚えにくいが、いつもは「兄ちゃん」と呼んでいるし、普段から他人のことを名前で呼ぶことは全くなかったから、別に不便ではなかった。

「今日は、兄ちゃんとどこかへ行こうかな」

飛鳥は従兄がいるであろう居間へと向かった。

飛鳥が居間に入ると、従兄の泳魚はテレビを見ていた。いや、テレビを見ているというよりは、どこか別の場所を見てぼんやりとしていた。

「おはよ」

飛鳥は元気よく言った。その声に反応して、泳魚は白い歯を見せにこっと笑った。半袖から細身の白い腕が覗いている。その肌の色は日に焼けた飛鳥とは対照的で、暑さとは無縁の色をしていた。色白と言っても、決して不健康な病弱な感じの青白い色と言うわけではなく、太陽の照る外に出ない家の中で過ごすほうが好きな人間の

肌の色だった。
「暇そうだね」
飛鳥は言った。
泳魚は少し遅れて頷いた。
「飛鳥の感覚にあわせると、暇な部類になるかもな」
彼はもう一度頷いた。
「どういう意味？」
泳魚のからかうような口調が気になった。
「つまりオレは暇では無かったということさ。考え事をしていたんだから、ぼんやりとね」
「そういうのを、暇って言うんだよ」
「それは、飛鳥の感覚でだろう？」
にっと笑う。
「いじわる、へりくつだ」
泳魚は少し変わっている思考の持ち主なのだ。

「そういえば、あの狐は？　今日は見かけないな」
泳魚は言う。
飛鳥の家は古い温泉宿である。その宿の一角に白狐を奉っている祠があるのだ。泳魚の言うあの狐というのは、この家に昔から住み着いている、ハクアという名前の白い狐のことだ。
彼ら二人以外の者には見えないこの狐は、飛鳥が幼いころから、いや、飛鳥が生まれるずっと前から、ここに住んでいる。最初、そうと知ったときは、家で奉っている狐がこんな小さな子供な狐とは思わなかった。
宿は年間を通して観光客で賑わっている。夏休みなど長期の休みがある時期は、大人たちは特に忙しく誰も相手にしてくれない。
しかも飛鳥の住む町は、過疎化が進んで同世代の子供も少なく、一番近くの友人の家は山を登ったところにしかない。
そういう環境だったので、飛鳥は多くの時間を一人で過ごさなけ

ればならなかった。
　飛鳥は狐のハクアと出会って、早い段階で他人には見えていないということに気がついていたし、昔から一人遊びばかりだったので遊び相手が誰にも見えない白狐だったとしても、忙しい大人たちは誰も気にしなかったのだ。
　それにハクアの方も、人の多い所をあまり好まなかったので、飛鳥が「何か」と遊んでいる姿を見ることも少なかったであろう。

「ハクアとは、いつも一緒にいるわけではないからね、どこにいるかまでは分からないや」
「そうか、いつも一緒にいるわけではないんだな」
「近くにいると思うよ。ここの、この場所の守り神なんだから。でも、まさか兄ちゃんも見えるとは思わなかったよ」
　今まで飛鳥にしか見えなかった、この秘密を共有できる人ができたことに密かに嬉しさを感じていたのだ。
「俺も、同じさ。伝説の狐さまに会うことができるとはな。さすが白狐旅館だな」

「……そう、この宿の血筋を引くものは、たまに視える人間が生まれる」
　噂をすれば、現れる白狐のハクア。
「飛鳥は間違いなくこの地の加護を受けている」
「きたな、狐の」と、泳魚は言う。
「まぁ、君も加護を受けていることには違いないな」
　ハクアは目を細める。ハクアはなぜか泳魚と一定の距離を置いているように見え、打ち解けようとはしなかった。
「どうして、こう、ぎくしゃくしているのかな」
　飛鳥はため息をつく。
「仕方ないよ。オレは従兄弟といえ、この土地で生まれた人間ではないからな。この土地にそぐわない変な匂いでも、染み付いている

のだろうさ」
「そう言うものなのかな」
「まぁ、飛鳥も喜んでいるみたいだし、多少は我慢してやるか。なにせ飛鳥の『従兄弟』だしな」
そう言うとふいっとそっぽを向き、またどこかへ消えていってしまう。相変わらず自由気ままである。
「さすが、白狐様は心が広い」
泳魚は苦笑いした。

「ところでさ。今日は久々に晴れたからどこかへ行かない？　あいにくの天気だけれど、綺麗なんだよ」
飛鳥は泳魚に一つの提案をする。
「ほほう、それはぜひ行ってみたいな」
「じゃあ、ハクアも連れてさ、行こう！」
飛鳥はハクアと泳魚に仲良くなって欲しかったのだ。
「今から行くのは良いが。寝巻き姿の奴は、さっさと着替えた方がいいな」
泳魚はそう指摘した。飛鳥は自分が寝巻き姿ということに気が付いた。
「すぐ着替えてくる」
飛鳥は慌てて部屋を出ていった。
「まだまだ、子供だな」
彼はくすっと笑った。
泳魚は窓を開け目をつぶった。風に乗ってやってくる瀧のしぶきの音が彼には微かに聞こえていた。この温泉から見える山の中腹にその瀧がある。しかし、瀧があるといってもなんとなく見えるというだけで、全容を見るには山を登らなくてはいけない。

「着替えてきたよ、さぁ行こう！」
飛鳥はやる気満々だ。

「朝ごはんは？　飛鳥はまだだろう？　もちろん食べてから、行こうな」
「むぅ」
飛鳥は、再び部屋を出て行く。
「朝から、元気なんだな」
泳魚は微笑んだ。
「そうだ、滝につく頃にはお昼になっているだろう。弁当、準備しておいてやるか。宿の人に、適当にパンでももらって」
その後について泳魚も、部屋を出ていった。

## 二・波紋のように凪ぐ

雲に見え隠れする太陽は南の空高く昇っている。暑さは最高潮に達し、蝉の宴も盛り上がっている。

「もう二時間は歩いているんじゃない？」

飛鳥は膝に手をつく。夏の蒸し暑さの中、山道を歩くのは少し辛い。

「まだ三十分も経っていないぞ」

飛鳥の前を歩いていた従兄弟は振り返る。

「迷ったとか、思ってないか？」

ハクアはからかうように言う。

「もう、迷うわけ無いじゃん、一本道なんだから！」

「はっはっは。二人は、見ていて楽しいな」

そんな様子を見て、泳魚は笑った。

川沿いの山道を歩いていると、少年たちの視界に青い橋が入ってきた。青色が所々剥がれ、赤褐色が除いている。この橋は少し上流の方にある鉄筋の橋が完成したら、無くなってしまう。

「この橋、無くなっちゃうんだよね」

飛鳥は先頭にたって橋を渡り始めた。橋の半分ほどを渡ると、川を見下ろした。

「ここも、ずいぶん変わっちゃったんだよね」

川の土手、全てが灰色、左右対称で機械的だった。

「ほらほら、こんな所で止まらないで」

泳魚は後ろから声をかける。

「その通り、感傷にひたっている暇は無い。後ろがつかえている」

宙に浮かんでいて、つかえる要素の無いハクアまで言う。

「ハイハイ、分かりましたよーだ」

飛鳥はわざと早歩きを始めた。

そこから少し進むと、灰色のアスファルトの地面が、いつの間にか土に変わっていた。急な上り坂の路には、所々雑草が根づいている。木々の合間から見える河原の石は角張り巨大なものが増えていく。

「あ、滝の音が聞こえる」

飛鳥は言った。

「とうとう幻聴を聞くようになってしまったのかい？　飛鳥？」

ハクアは面白半分に言った。

「む。確かに聞こえたんだよ」

飛鳥は自分の耳が正しいということを、示すため河原に降りた。

「ほら、やっぱり滝の音だった」

飛鳥の指差す先、そこには瀧があった。その滝は『虹（こうげい）？の滝』と呼ばれている。滝は遠くから見ると黒い岩肌と緑の森を縫いつけている白い糸のように見え、流れ落ちているという感じは受けない。しかし、近くから見ると全く違う印象を受ける。黒い岩肌と白い水しぶきの正反対同士の関係が押し寄せてくるのだ。それだけではない、とても晴れた日には突き出した岩岩に滝がぶつかり、しぶきを撒散らすと太陽の光を受け七色に輝くのだ。

「本当に綺麗だな。水しぶきの銀に、黒い岩肌に」

「ここでは、誰でも詩人になれるらしいな」

ハクアはにやりと笑う。

「どうしてハクアはそう、兄ちゃんに突っかかるの」

「ふん」

ハクアはそっぽを向く。

「もう」

飛鳥はため息をつく。

「素直じゃないだけだよ。基本的に、精霊とかそう言う類のものは、あまり『他』とは関わろうとしないんだよ。一応、オレは部外者なわけだしね」

「そういうものなのかなぁ」
飛鳥は、あまり納得できなかった。
「飛鳥も、こっちにおいでよ。霧吹きみたいで気持ちいいぞ」
泳魚はしぶきが軽くかかるくらいまで近づいていた。
「僕は、いいよ」
飛鳥は首を振った。水に濡れるのは嫌だったのだ。
「まだ、水が怖いんだな……」
ハクアはそっと飛鳥にささやく。飛鳥は幼い頃、溺れたことがある。だから、あまり濡れるのは好きではないのだ。
「前よりはましになったよ。プールで泳げるようになったし」
飛鳥はひざをつき、水中の黒い岩肌に触れた。
「ほら、こうやって、覗くことも触ることもできるようになった」
樹の影が映った水は、差し込む光と合わさり、いっそう透き通って流れ布のように、柔らかい感じがした。水中の魚は日光に照らされて、黄金に輝いている。そこは、宝石箱のように見えた。
「あれ？」
飛鳥は一瞬、水の中に森の木々ではない何か別のものが見えたような気がした。
「飛鳥？」
泳魚は飛鳥を呼ぶ。
「その辺は滑るから気をつけて」
泳魚は飛鳥に注意する。
「えっ？」
泳魚の言葉に、飛鳥ははっとした。
「わわ」
飛鳥が足を置いた石は安定していなかった。石は彼の足を乗せたまま、川のほうに滑り落ちた。右足の感じた水温は冷たかった。飛鳥は、慌てて足を水の中から出した。
「って、言うそばから」

「兄ちゃんが、急に声をかけるから、落ちちゃったんだよ！」
「そうか、悪い悪い」
泳魚は悪びれた様子もなく、駆け寄ってくる。
水面はもういつものように、変わらず緑の木々を映し揺らいでいた。
飛鳥は濡れた片足を見つめる。
「飛鳥、大丈夫か？」
ハクアは声をかける。
「う、うん、大丈夫。濡れたって、平気だよ」
しかし、飛鳥は水辺から離れた。
「どうして、兄ちゃんは滑らないの？」
泳魚は、滑りやすい河原を、苦もなく歩いているように見えた。
「転びたくないからね、地面を踏んで歩いてないんだよ。地面さえ踏まなければ、すべらないだろ？」
彼は口の端をくいっと上げ、にぃっと笑う。
「もちろん冗談だが」

「ぐぅ」と音が聞こえた。
少年たちは、顔を見合わせた。
そして、一斉に吹き出した。
「飛鳥、お腹鳴ったろ」
泳魚は、飛鳥の肩を軽く叩く。
「もうお昼だからな。よし昼飯を食べよう。これはお前の分」
「うん、ありがと」
飛鳥は、泳魚が差し出した弁当箱を受け取る。
「お弁当、持ってきてたんだ」
準備のよさに飛鳥は感心する。泳魚のリュックに入っていたのは、水筒だけだと思っていたのだ。
「今朝、こそこそと作っていたからな」
全て見ていたハクアは言った。

飛鳥はお弁当の蓋を開けた。
「あ、僕の好きな卵サンドだ。いただきます」

昼食も食べ終わり、二人と一匹は滝を見ていた。見上げた空が木々の緑で隠されている。
「魚が滝を昇り、七色に輝く鱗を持つ龍となって、空に還るとき虹ができる」
「なにそれ」
「よく言うだろ？　滝を昇った魚が竜になると言う話」
「なんとなくは」
飛鳥は言った。

「ところで、一本だけの虹を見ると、寂しくならないか？」
泳魚は、ぽつりと言った。飛鳥は彼の思考についていけなかったので首をかしげた。
「何だそれ？」
「虹にはオスとメスがいるんだ。虹が二つで来たとき、濃（げい）くて鮮やかな主虹がオスで虹と呼ばれ、薄くて淡い副虹がメスで？と呼ばれている。だから、一本のときは、オスだけなのさ。さびしいだろ？」
説明口調で言う。
「そういうものかな？」
「飛鳥には、まだ早い話かな？」
「そんなことないもん！」
「さて、どうだか」
泳魚は、ニヤニヤと笑う。

「そういえば、あの滝にはひとつ伝説があってな。雄竜が雌竜を互いを慕って呼び合っている声が、時々しぶきの音に混じって聞こえると言う……」
「へぇ、そうなんだ」

ハクアのその話に、飛鳥は聞き入っている。
「昔の人は、虹をとうてい美しいものとしては扱えなかった。実体のない滝の主に、不気味さと、畏怖を持ってここを奉っていた」
ハクアは語りだす。
水気の含んだ涼しい風と音が、時を流れていく。
「あれ？　飛鳥、何か言ったかい？」
泳魚は、あたりを見回しながら言う。
「な、何も言ってないよ」
「おかしいな？　声が聞こえたんだけれど……」
「き、気のせいじゃない？」
飛鳥は、息を飲んだ。さきほど、ハクアが言っていた話が本当なら、それは、龍の声と言うことになる。
「おかしいな？　ほら、耳を澄ましてごらん、何か聞こえないかい……」
泳魚はさらに言う。
「本当に、聞こえないのか？」
ハクアは、にやりとする。
「ど、どういう意味？」
泳魚だけではなく、ハクアにまで聞こえたと言うのだろうか。
「ほら、飛鳥！　水の中から手が、青い手が！」
泳魚は叫ぶ。
「ひゃああ」
飛鳥は、泳魚にしがみつく。
「冗談だ」
泳魚は肩を震わせ笑う。
「もう、ハクアも兄ちゃんも、こういうときは、気が合うんだから」
飛鳥は、声を張り上げる。
「悪い悪い」
泳魚の笑いは、まだ止まらない。
「ちっ、良いところは、持っていかれた。これだからヤツは嫌いだ」

ハクアは、そうつぶやいた。

## 三・水たまりに咲く花の魚

空を厚く覆う雲は街の灯に淡く色づいて、雲間からほんの少しのぞく夜空の闇色をほのかに染めている。覆う雲さえなければ、天の河があふれんばかりの光を湛えて、空を満たしていただろう。宙の海に夏の大三角形は浮かび、落ちてくる煌く星々の流れ、月の光が地上に降りそそいでいただろう。しかし今年は、空は見えない。降り注ぐものと言ったら、雨の粒ばかり。水の香りを含んだ大気が肌にまとわりついて、蒸し暑さだけは、いつもと変わらない夏の空気。それだけが、かろうじて季節が夏であることを告げていた。

今は雨は止んでいるが、長く雨が続いていたため、道には水たまりがたくさんできている。昼と違って自動車が通っていない静かな道路に、飛沫を上げるものはなく、水たまりは穏やかに、重たい空を映している。見上げた空も、それを映す水たまりも、同じ色に染まっている。

飛鳥は、その水たまりを弾きながら、右へ左へとせわしなく歩いていく。その後ろを、ハクアと泳魚はついていく。

「飛鳥、転ぶぞー」

「だ～いじょうぶ～」

飛鳥はくるくると回り、泳魚の方を見る。

「早く、お祭りに行きたいの」

「ははは、本当にまだまだ、子供なんだから」

そのとき、静寂を破る音が、水たまりを揺らしながら地上から放たれた。大気を震わす音と同時に円状の花火が散る。紅玉や翡翠（ひすい）のような粒が飛び、夜空に落ちていく。

「あ、始まっちゃったよ」

大きな音と共に、第一発目の花火が空に上がったのだ。飛鳥は駆け出した。

「早く、早く！」
「そんなに急がなくても、歩きながらでも楽しめるぞ」
高い障害物の少ない田舎の町は、空も充分広く、花火を邪魔するモノは少ない。それに町で行われる小さな花火大会なので、人も多くはない。今からでも、ゆっくり見られる場所は確保できるだろう。
「でも、早く近くで見たいの」
「はいはい」
泳魚も仕方なく少し歩く速度を上げる。
「もう、何やってるの？　早く！」
なかなか来てくれない泳魚に痺れを切らして、飛鳥は引き返してくる。足元の水たまりの飛沫を舞わせながら、水たまりに映る花火を散らしながら。
「早く早く！」
夜の闇、そして次にやってくるほんの少しの花火の光、交互にやってくる中、世界が揺らめいている。鱗の羽が舞い、泡が覆う。飛鳥は泳魚を見た。泳魚は微笑みながら、手を差し出している。
「兄ちゃん？」
漂う気配に飛鳥は、目をこする。
「飛鳥？　どうした？」
泳魚の言葉が飛鳥に届くと、世界の揺らめきは収まり、残像のように消えていく。
「なんでもない。気のせいだったみたい」
泳魚の手をつかむと、飛鳥は歩き出す。
「早く行こうよ」
花火は曇った空を彩り、星の代わりに空を照らし輝いていた。
町の小さな花火大会の会場とはいえ、数軒のちょっとした食べ物の露店が出ている。人々はそれに列を作り、花火を見ながら自分の番を待っていた。あいにくの曇り空で、花火の美しさは最大限には発揮されていなかったが、それでも見上げる人々は花火が上がるたびに感嘆の声を上げている。

「ほら、カキ氷かって来たぞ」
泳魚は、木に寄りかかり花火を眺めている飛鳥にカキ氷を手渡した。
「ありがとう」
飛鳥は赤く染まったカキ氷を、一口食べた。
冷たい氷は、口の中で溶ける。
「おいしいね」
苺シッロプの雫のような花火が空を飾る。空を赤く染めたかと思うと、すぐに溶けなくなってしまった。

「ちらほら、人間じゃない人たちがいるね」
飛鳥はだからといって特に気にすることもなく、彼らとすれ違っていく。
「こういう祭りは、彼らも好きなんだよ。な、ハクア？」
「精霊も人も似たり寄ったりだからな」
盆の時期、騒いでいるのは何も人だけではないのだ。現世（うつしよ）と幻世（まぼろよ）のあいまいなこの時期は何もかもが騒がしい。精霊、祖霊、亡霊といった、霊とつく名のモノたちも、にぎやかな場に紛れ込んでは祭りを楽しんでいるのだ。
飛鳥と泳魚、もちろんハクアも、彼らの姿が視える。たまに彼らの方も視られていることに気がつくが、だからといってどうということもない。お互い干渉しあわなければ、たいていの場合それ以上のことは起きない。目の前を道を歩いていく人に声をかけなければ、人は特に何も思うことなく通り過ぎるだけなのだ。「どこへ行くのですか？」などと話しかけてしまうと、ややこしくなる。知らない人から、突然話しかけられたら、だれでも驚くだろう。向こうの領域とこちらの領域を、無駄に意識しすぎるのは、疲れるし面倒くさい。これはどの世界においても同じことだ。
泳魚は飛鳥のほうを見た。飛鳥の顔が赤や緑の色に染まっている。

「飛鳥、君は……」
泳魚は、花火に夢中の飛鳥に向かって言う。
「なあに？」飛鳥は首をかしげた。花火の音のせいで、泳魚の声は良く聞こえなかったのだ。
「……君は」泳魚は口を開きかけた。「……いや、何でもない、忘れてくれ」
「ん、うん」
飛鳥は、もう空に輝く花火に夢中だった。
空に響く音。橙の炎が再び夜空に放たれ、咲く火の花が空を彩る。散らす碧の波紋、流星のように飛び交う火、黄金の草が噴出して、空にも、そして、水たまりにも美しくあった。
「この空に、あの花火のように舞えたら、どんなに素敵なことか」
泳魚は空を見上げ、そうつぶやいた。

花火も終わり、飛鳥と泳魚は露店をめぐることにした。曇り空の下、電球に照らされた露店の薄明るい光の中では、小さな露店で雑多に山積みになっていると言うだけで、たくさんの露店が所狭しと並んでいるだけで、それだけで非日常的である。普段見かけるものでもどこか違うような、そんな不思議な雰囲気に染まっている景色になるように感じるのだ。
少しくすんだ赤や青の布製の日よけが通りに沿って群れをなし、その露店はずっと遠くまで続いていた。それが薄暗い境内の不思議な雰囲気と重なって、妖しい異世界から来たような感覚に襲われ、なんだか、どきどき、わくわくしてしまう。
「あ、金魚すくいだって」
飛鳥は駆け出した。
「もう少し、落ち着きがあると、良いのだがな」
露店に向かう飛鳥を見ながらハクアは言う。
「まぁまぁ、まだ子供なんだから」
「あんまり、うろちょろするとこういう日に、別の世界に迷い込ん

でしまうぞ」
　特に祭りの行われる場所は、この世界と違う世界の境界があいまいになる。境の内に存在する場所、神社の境内は、それが顕著に現れる。にぎやかな祭りの露店、露店からの間接照明で、妖しく光る稲荷の像、像が見つめる境内の暗がり、祭りの隅、人混みの流れ、ざわめき、そのゆらぎにそっと目を移せば、目に映るのは、現実の世界か、それとも、幻の世界か――
「大丈夫だろ、ハクア？　君が、そうさせないのだから」
「しかし、限度というものがある。最近は、誰かさんのせいで、特に揺らぐ……」
「……分かっている。それはもう、充分に」
　泳魚は空を見た。厚い雲が今も風にゆっくりと流されている。その雲と風の合間に、雨は舞っている。
　ハクアは、ため息をつき、口を開いた。
「まぁ、飛鳥は常に片足、向こう側の世界に突っ込んでいるようなものだけれどな」
「だから、飛鳥は君が見えてしまうのだろ？」
「その通り。しかし、お前も似たようなものだ。片足を突っ込んでいる先が、こちらの世界で……って、おい、聞いているのか？」
「飛鳥が呼んでる、行かなきゃ」
　泳魚は聞き飽きたとばかりに、飛鳥の隣へさっさと行ってしまう。ハクアは、再びため息をついた。
「だから、あいつは、いつも」

　飛鳥は、その水の張られた水色のプラスチックの水槽を覗きこんでいる。水面に映る露店の明かりが、水と共に踊っている。水の中で泳ぐ金魚たちがその照明に照らされて、その赤みの鱗がはっきりと金色に輝いていた。赤や黒の金魚は群れを成し、尾を振りながら悠々と泳いでいる。
「金魚」

飛鳥の家では、金魚を飼っていた。飛鳥が物心つく頃には、もう既にこの場所にいた金魚である。もう十年ほどの付き合いになるだろうか。ずっと飛鳥と共に育ってきた。ここまで育つと、もはや金魚ではなく立派なフナのようであった。しかし、盆を前にして死んでしまった。長く生きたから、もう寿命だったんだと、大人たちは言っていた。

「飛鳥は、金魚すくいしたいのかい？」

泳魚は赤い魚をじっと見ている飛鳥にそう語りかける。

「わからない」

飛鳥はそう、短く言った。

「家にも、金魚がいたんだ。八月のはじめくらいに死んじゃったけれど。あの金魚も、こういうお祭りで、うちへ来たのかな」

今はもういない金魚を思い、飛鳥は言う。

「多分ね、ずっと、昔にね」

泳魚はそう言う事しか出来なかった。

飛鳥は飽きもせず、ただただ揺れる水面を見ているだけである。

「あのうちにいる金魚、もしかして兄ちゃんが取ってきたの？」

「どうしてそう思うんだ？」

「だって……」

飛鳥は泳魚を見上げた。泳魚は黙ったまま、飛鳥を見つめている。露天の明かりに照らされて、白い肌に黄色が揺れている。

「だって、兄ちゃんがあのからっぽの水槽を見るとき、本当に寂しそうな目になるんだもの」

そうなのだ。今朝だって、泳魚はあの居間に置かれた空っぽの水槽を、うわの空で見ていたのだ。

飛鳥は、泳魚の目を見る。黒い闇色に水面の光が揺れていた。まるで水の中にあるかのような揺らぎが見えた。その眼に泳ぐ赤い魚が優雅に泳いでいる。

「……金魚？」

飛鳥は、瞬きをした。露店の金魚も瞳の金魚も、煌きを身にまと

い、ゆらゆらと光りの中にあった。とても美しくあるその金魚たちは、飛鳥を誘うように、ゆっくりと手を伸ばす。
「おーい、飛鳥。どうした？」
泳魚は、心ここにあらずな飛鳥に語りかける。
「え？　何？　兄ちゃん？」
飛鳥は、はっと我に返る。
「どうした、オレの顔に何かついているのか？」
「ううん、何でもない」
泳魚の瞳をもう一度見てみるが、もうその魚はいなかった。
「気のせいだったみたい」

「ところで、金魚すくいはいいのか？」
どこからともなく現れたハクアは、飛鳥の背後から言う。
「ハクアの言う通りだぞ、飛鳥。いつまでも、金魚を見ているだけというわけにはいかない」
店は混んでいるという訳ではないが、いつまでもここにいて、見ているだけでは、露店の人や他の客の邪魔になってしまう。
「ん、どうしようか迷っているんだよね。お祭りの金魚って、すぐに死んじゃうこと多いよね。それが、ちょっとかわいそうで」
飛鳥は、なんとなくだけれど、そう思った。
「確かに……（ここにいる金魚で、生き残れるのは、半分もいないだろうな……）」
泳魚は目を細め、おびえたように隅っこへ集まっている金魚たちを見る。
金魚は、露店の仄明かり（ほのあかり）にぼうっと映え、宝石のようにある。水面付近で口を大きく開けて、くらくらしているように見える金魚たち。過密とも思える水の中、追われ、時には、紙でできた網（ポイ）が破けて、そこから落とされているのだ。
「でも、どうせ飛鳥は、したいのだろう？」
ハクアは、白い小さな牙を見せ、笑ったような表情を見せる。飛

鳥は黙ったままだが、ハクアには分かっているのだ。飛鳥が金魚すくいをしたいということが。
そうでなければ、金魚すくいに興味は持たないはずだ。なんとなくかわいそうだと思っても、やってみたくなる、それが金魚すくいの魔力なのだ。
飛鳥はしばらく考えて、「やりたい」と、正直にそう答えた。
「じゃあ、オレがお金を店の人に渡すよ」
そう言って泳魚は露店の人にお金を渡し、それと引き換えに金魚をすくうための網を受け取る。
「ほら、飛鳥。がんばれよ」
そして、泳魚は飛鳥に紙製の網を手渡した。
「ありがとう、兄ちゃん」
「せいぜいがんばるんだな」
「うん、がんばるよ」
泳魚とハクアの声援に意気込み、紙製の網を手にしっかりと持つ。水面下を泳ぐどの金魚に狙いを定めるのか、まじろぎもせず、食い入るように見つめている。飛鳥は意を決し、そっと、白い紙網を水の中に入れる。紙は水を吸い、瞬く間に薄灰色に変わっていく。
水の抵抗が紙の部分にかからない様に注意しながら、飛鳥は金魚を追う。
「右だ。左だ。もう、トロいなぁ、飛鳥は」
熱気のこもったハクアの声援が、頭上から絶え間なく聞こえる。
「ハクア、うるさいよ……」
飛鳥は、集中できないでいた。
「ハクアも意外と子供なんだな」
泳魚は、そんな様子のハクアを優しい笑みを浮かべながら見ていた。
「む、少なくとも、お前たちの数倍は生きているぞ」
ハクアは、そう反論する。
「二人とも、静かにしてよ」

多少静かになったので、飛鳥は再び集中し水中に網を入れる。少しの奮闘の末、泳ぐ方向に迷いが生じたのか、一匹の金魚の動きが鈍くなった。飛鳥はそれを見逃さなかった。すっと紙の網を金魚の下のもぐりこませ、水面まで持ち上げる。そして、すぐに水の少し入ったおわんに、紙の網に乗せた金魚を移す。

「一匹取れた」

しかし、紙はだいぶふやけ、ちいさな穴も開いている。慎重にしなくては、すぐに破けてしまうだろう。

「落ち着いてすくえば、大丈夫だな」

「うん、がんばるよ」

飛鳥は細心の注意を払いながら、再び水の中へ網を入れる。一匹の金魚に狙いを定め、うまく網の上へ誘導する。金魚の尾が、網に当たり紙は破けた。しかし、間一髪、なんとか二匹目の金魚を、器にすくうことに成功した。もう網は大破し、水色の枠にほんの気持ち程度、へばり付いているだけであった。飛鳥は、枠だけになった網越しに魚とハクアを覗き見る。滴る水滴が、飛鳥の手を伝っていく。

「あぁ、すっかり、やぶけちゃったね」

「でも、二匹、すくえたな」

ハクアはそう言って、器の中の金魚を眺めた。

「そうだね」

すくった二匹の金魚を、透明のビニール袋に入れてもらう。透明なビニール袋の中、慣れない空間に、大きな目であたりを落ち着きなく見回している金魚たち。

「この金魚、うちの金魚のように長生きするかな」

「多分、大丈夫だよ、その金魚たち、戸惑っているけれど元気そうだし。二、三日、静かなところで休ませれば、きっと……」

「じゃあ、この金魚さんを、驚かさないようにそっと持ち運ばないとね」

飛鳥は、金魚の入った袋を目の高さまで上げ、照々と煌やかに瞬

く赤い鱗を、夢現な心地で見入っている。
「そうだ、オレが、長生きさせるとっておきの秘訣を伝授しよう」
「本当？　帰ったら教えて」
二匹の金魚を手に入れて、満足げなその表情の飛鳥を見て、泳魚はほほえましく、見守っていた。

## 三・水たまりに咲く花の魚（後書き）

どうでもいい話ですが、七色カキ氷を、１回やったことがあります。
虹の配色のように、放射状に並べて、
イチゴ、オレンジ、レモン、メロン、ブルーハワイ、ブルーベリー、
コーラ、練乳……
（ん？８色あるけれどまぁいいや）
それは、最初はとてもきれいでした。
しかし、食べ進めると、色が混ざって、だんだん黒くなっていきます。

虹の色……淡く儚い色。

## 四・雫に流離う水泡、何時か聞いた水声、泡が見た夢。

……なぜ、自分はここにいるのだろう。
雫がまたひとつ、落ちた。
におい漂う水面の波紋は、木目のように円を描く。
（空へ還るその日まで……）

……どこへ行こうとしているのだろう。
流れる水の中にいるような、流離（さすらう）う感覚がする。
離合する水流は、同じ場所にはとどまっておらず、常に移動している。
うっかりしていると、このまま流されてしまいそうだ。
（泡のように消えて……）
……いつからここにいるのだろう。
水底から、三つ二つと泡が発生した。
泡の生まれる音、水面を揺らす水滴と水声（すいせい）のみが、時を満たしていく。
（悲しまないで……）

何も、おぼえていない。何も、考えたくない。
時の止まったような、この冷たい静かな空間は、余りにも心地がいい。
「……早く」
かわいた水泡（みなわ）の音に混じって、声が聞こえてくる。
……誰かがいる。
……誰かがいて、呼んでいる。
「この手をつかむんだ、飛鳥」
聞こえる声、差し伸べられる白く細い腕。
いつかのその手は、揺らめく水中だというのに、はっきりと見る

ことができた。
ただ、ぼんやりとした意識が、支配しているその体は、動かない。
……くるしいよう。
水中に生きる魚とは異なる形の、人の体では水中では、呼吸さえもできないのだ。
声に、外界から聞こえたその声に。思い出したかのように、体がこの世界を拒絶する。

泡がすべてを覆い始めた。視界をさえぎるように。
がんばって手を伸ばそうと、それでも、なんとか、重い腕を。
……感覚が水に溶けてしまった意識の中、生きるために。
見上げた水面は、泡の白で覆われ、視界は閉ざされた。
たくさんの泡。
……全てが白い闇に溶けていく。
夢。

## 五・死の世界への橋は

飛鳥は目を開いた。
部屋は淡い藍色。太陽はまだ東の空に顔を出していないほど、朝早いのだろう。
「嫌な夢だ……」
飛鳥は呼吸が正常にできるか、胸に手を当てて確かめた。汗が額から滴る。体中汗で、びっしょりであった。最近はすっかり見なくなった昔の記憶、溺れた時の恐怖の気配。
外からは雨音。今日もまた、雨。湿度の高い木の匂い。視界の端に見える天井は、あいも変わらず揺れる水のような無数の木目をたたえていた。
飛鳥は意識がはっきりしないまま起き上がる。まとわりつく湿った寝巻き。
「うぅ、目覚め最悪……」
隣で寝ている従兄を起こさないように身支度をし、そして部屋を出た。

雨の日の朝の気温は昼間に比べれば涼しいものだったが、まとわりつくような湿気を含んだ空気が肌に感じる温度の不快指数を上げていた。
飛鳥は居間に入ると、カーテンも開けず冷房をつけた。冷やされた空気が、白色の機械の風口から吹き始める。これで部屋は冷え、過ごしやすくなるだろう。次に飛鳥はちゃぶ台の上にあるテレビのリモコンをつかむと、電源のボタンを押した。少し古いブラウン管のテレビなので、画像が映るまでに少し時間がかかる。ぼんやりと、赤や青や緑の何色かの縦縞が現れる。試験電波発信中――まだ、何も番組を放送していないようだ。
「つまらない」

早起きは三文の得とは言うけれど、やることが無ければそれは損にしかならない。飛鳥はテレビも消さず、そのまま畳の床に寝転んだ。

薄暗い部屋。その部屋の隅から、はねる水の音が聞こえた。それは、金魚。その水槽の中の赤い魚が、水をはじいた音。水槽の中で金色の鱗を煌かせ、空気ポンプの泡をまといながら泳いでいた。金魚の大きな瞳は何も映していないただの黒い色をしていた。

この金魚は、何を思っているのだろう？

狭い水槽の中で悲しそうに見えるのは、人間の勝手な感情がそう思わせているのか？

飛鳥は、ただその様子を眺めていた。

水槽の金魚は、水に揺れている。

飛鳥の作り出した暗く涼しい部屋は、破られることのないように静かに時を刻んでいた。テレビからはいつのまにか縦縞が消え、花畑が現れていた。ピアノの演奏と共に、知らない場所で咲いている白と黄色の花は風に揺れている。飛鳥は視界の端でそれを見ていた。

「ゆらゆらゆれる、世界。雨が降れば、揺れる水の中。暗く狭い世界……」

飛鳥の瞳は、開かれているのに、テレビの映像も部屋の景色もまるで映っていない。ただただ、力なく黒い色があるだけだった。

「なに、意味不明な独り言を言っているんだ？」

静寂の景色を破って、何の気配もまとわず現れたのは、ハクアであった。

「あ、ハクア、いたんだ」

飛鳥はまだぼうっとする意識のまま、声のした方を見た。夏に似つかわしくない雪のように柔らかで混じりけのない毛並みは、冷房の効いた薄暗いこの風景にあってより涼しげにそこにある。

「いたんだとは、なんだ。いつも、いるではないか」

「まぁ、確かにそうなんだけれど」

飛鳥は、気だるそうに瞬きをする。
「毎日雨だと、あれだね。外にも遊びに行けないね」
カーテンを閉めているものの、雨の音は今も飛鳥の耳にも届いていた。こういう雨が多い年は、川の急な増水とか、山の地盤が緩んで崩れるかもしれないとか、そういうことが起きるので近づかないようにと、夏休みに入る前に学校から注意を受けた。いつも見慣れた場所に潜む意外と危険な山と川の一面。
「昨日は思いっきり、山に行っていたけどな」
「それは、ハクアがいたし。ハクアがいれば安心だもの」
何か危険があれば、ハクアは教えてくれるのだ。実体を持たないこの白狐は、自然の流れを感知できる。いや、むしろ自然が実体化したものだから、当たり前のように変化を感じることができるのかもしれない。
「本当にすごいよね。尊敬するよ」
「ふん、あたりまえだ」
ハクアはまぶたを閉じて、誇ったようにヒゲを広げた。
「そうでなくとも、飛鳥のようなふわらふわらしている人間は、危なっかしくて」
「そんなこと無いもん」
飛鳥は頬を膨らます。
「どうだか」
ハクアはにやりと笑うように、小さな牙を見せた。そして半透明の白い尻尾を揺らしながら、毛づくろいしていをはじめた。その様子を見たら、犬か猫と見間違ってしまうかもしれない。他人に見えないことを除けば、普通の獣にしか見えないのである。もしも撫でることができたなら、ふわっとした毛並みの触り心地が、手に伝わることだろう。しかしハクアには実態が無い。その流れるように美しい毛並みは見て楽しむことしかできないのだ。
「ん、ヤツが起きたみたいだな」

ハクアは耳だけをピンと立て、隣の部屋のほうに向ける。
「兄ちゃん、起きたのか。早いねやっぱり」
「飛鳥は、なかなか起きないものな」
「そんなことないもん」
飛鳥は再び頬を膨らましたが、ハクアはそれを気にせず、背伸びをする。
「さてそろそろ、見回りに行くかな」
それは、言い訳なのを飛鳥は知っていた。ハクアは普段「見回りに行く」と、わざわざ言わないのだ。
「なんで、兄ちゃんをそんなに避けるの？」
この部屋から立ち去る理由は、それしかない。この質問にハクアは少し黙っていたが、一言だけぽつりと言った。
「ヤツは雨男だからな。近づくと湿気がうつる」
ハクアはそう言うと、視界から消えた。
「意味が分からないよ、それ」
泳魚の何が気に入らないと言うのだろう。飛鳥にはそれが全く分からなかった。

「おぉ、涼しいな」
泳魚が冷房のきいた部屋へ入ってきた。それと共に水の匂いを含んだ空気が、開いた扉から入ってくる。肌にまとわり付くその空気の流れが、今の季節が夏であることを思い出させる。
「あ。おはよう、兄ちゃん」
「おはよう。今日は早いな」
身支度もばっちり整えている泳魚は、寝起きとは思えなかった。そんな隙も見せない泳魚は、飛鳥の憧れでもあった。
「うん、なんか早く目が覚めちゃって、さ」
「そうか」
泳魚はそう、短く言った。

「あぁ、カーテンも開けないで」
泳魚はカーテン開ける。その気配に驚いた金魚が跳ねる。
「ん？」
彼はその音のした方に視線を移した。
「あぁ、金魚か。元気そうで何よりだ……」
泳魚が水槽が目線の高さまでくるように、ひざを折り曲げてかがんだ。いとおしそうに、目を細め眺めていた。
「兄ちゃんは、昔いた金魚、知っていたの？」
泳魚の金魚を見る目は、少し懐かしさを帯びていたのだ。
「あぁ、まだ、小さい魚だった頃から知っていたよ。昔は、もっと仲間がいたけれど」
「そっか」
飛鳥も、それ以上の言葉は出なかった。
「でも、悲しむことは無いよ。長く生きた魚は、死んだあと、天に昇り龍になるんだよ。そして、大地を見守り恵みをもたらすんだよ」
泳魚は、飛鳥を励ますようにそう語る。
「あの金魚も、龍になったのかな？」
「うん。だからきっと飛鳥のことも、あの空から見守っているよ。いつもその魚の世話をしてくれた、飛鳥のことをね」
「そうだったら、とても嬉しいな」
飛鳥は微笑み、窓の外を眺め始めた。そんな様子の飛鳥を横目に、泳魚は、再び金魚の水槽に目を落とす。
「この狭い水槽の中で、君はさびしくないのかい？」
泳魚が金魚に向かってそっと囁いた。金魚は「大丈夫」と返事をするように尾で水をはねた。

## 五・死の世界への橋は（後書き）

★関係ない雑学★

すくってきた金魚をそのまま水槽に移すと、もともといた金魚にも、病気をうつしてしまうかもしれません。

なので、しばらく別々にして様子を見ます。

水は、カルキ抜きをして下さいね。

その時に、その小さな水槽にも、ぶくぶくするポンプがあれば、なお安心です。

余裕があれば、塩分０・５％程度の水を作り、水合わせをしながら、その中に金魚を入れることが出来たら、多少の病原菌などを、殺す事が出来ます。

時々、水を新しいものに変えながら、１週間ほど様子を見て、特に異常がなさそうならば、飼育する水槽に移します。

しかし、すくってきた金魚は、どうしても、ストレスで弱っていることが多いので、色々手を尽くしても、死んでしまうことがあります。

それだけは、どうすることも出来ないので、かわいそうです。

１０日も生きれば、ひとまず、祭りでのストレスに打ち勝ったことになるだろう。

１ヶ月生きれば、その金魚は、特に健康だったのだろう。

１年生きれば、病気にかからない限り、ちょっとやそっとの事では、死ぬことは無いだろう。

１０年以上生きれば、もうその金魚は、大往生の域だろう。

祭りで家にやってきた金魚だとしても、運と体力と環境が良ければ、長く飼う事も可能なのです。

## 六・闇と光の境界線に

天気の悪い日続きで、大きく育つことができないアサガオが風に揺れている。しかしそれでも小さな葉の間で、花は咲かせる生命の強さを示している。今はもうだいぶ朝の時間から過ぎてしまったため、アサガオの花はしおれてしまっているが、夏の景色は確かにそこにある。

飛鳥は夏休みの宿題にとりかかっていた。七月の終わりから始まった夏休みも、そろそろ後半である。今までほんの少ししか手をつけていなかったのだが、時期的にそろそろ本格的にやり始めなくてはいけないと、なんとなく思ったからだ。

「何か手伝おうか？」

ノートを開く飛鳥の前で、泳魚は頬杖をついて見守っている。

「大丈夫、量があるだけで、難しいわけではなし」

飛鳥は鉛筆の先から目を放さずに言う。飛鳥は何事も早めに終わらせる性格でもなく、ぎりぎりになってから、周りを巻き込んで慌ててやるわけでもなかった。ただ、たとえぎりぎりになってから、やり始めたとしても、手伝ってくれる人は忙しい旅館の中にはいないのだ。そう言う経緯もあり、たいてい誰に言われるでもなく、なんとなく宿題は終わらせてしまっていた。それに宿題を手伝ってもらう方法というのか、手伝ってもらい方が分からないのだ。

「そうか」

泳魚は少し肩をすくめ、飛鳥が動かしている指の先を目で追っていた。

「そういえば、兄ちゃんは宿題ないの？」

「ん、あ、あぁ……」

泳魚は言葉を濁した。

「ふ～ん」

飛鳥は再び鉛筆を走らせる。あまり、深く追求しないほうが言い

と飛鳥は思ったからだ。
「わからないところがあったら、いつでも相談に乗るよ」
「うん、ありがとう」
飛鳥は少しだけ顔を上げて、泳魚を見る。白い肌の中にある少し茶けた瞳が、まるで保護者か何かのように、優しい笑みを浮かべて飛鳥のほうを見ている。
「俺が見ていると、やっぱり少し集中できないだろう？」
泳魚はしばらく飛鳥の様子を見ていたがふと立ち上がり、そう言うと部屋を出ていった。
「別に気にしてなかったんだけれどなぁ」
飛鳥はそう思ったが、追いかけていく程の事でもないので再び宿題に取り掛かった。

部屋を出た泳魚は一人、縁側にいた。ひとり灰色で重い雲をたたえた天空を見上げている。
「雨は龍が地上に降りてきた印」
誰に言うでもなく、移りゆく空に向かって囁いた。降り注ぐ雨はいつまでも静かな細かい雨を散らし？？夏の夕暮れ時にありがちな夕立、通り雨の土砂振りではなく、ただただ、しとしとしっとりと湿ったような空なのだ。こういう微妙な天気の時には、いくら夕暮れ時の残照の中であろうとヒグラシさえ鳴かなず静かなものである。
「じゃあ、今年はずいぶんと龍が降りてきているんだな。泳魚？」
ぼんやりと雲脚を見ていた泳魚は名前を呼ばれるとは思わず、その声にはっとする。
「ハクアか」
泳魚は少し微笑む。夕暮れの迫る空気に部屋の照明が点き始め、やや黄色を帯びた部屋からのこぼれ灯が白い壁に反射して、泳魚の白い肌をますます透けたように淡くその笑顔を染めていた。
「オレの名前、長い間呼んでもらってないから少し驚いたよ」

庭に咲く白いユウガオは、雨の香りと共に夕闇の気配によく馴染む。簾(すだれ)に蔦(つた)を絡ませて静かな雨粒が、白いドレスのようなその花びらに透明な宝石を飾る。風に煌きを散らしながら、揺れる緑の道に優雅に咲いている。その花と同じように、白く揺れている毛並みのハクアを泳魚は黙ったまま見つめる。

「白狐様はやはり何でも分かっていらっしゃる」

「ごまかすな、第一……」

「言いたいことは、分かっているよ、ハクア。それはオレが一番分かっているから……」

泳魚は再び空を見上げる。

「空は……広いな」

暗い朱色に染まった静かな夕暮れ。草むらの虫は唄い、魚は跳ね水音を響かせる。朱い朱い夕闇、夕暮れ。伸びる影。黒い鳥たちは、夕映えした雲と共に山のほうへと飛んでいく。

## 七・飛び交う火々の虫

「飛鳥、蛍を見に行かないか？　裏の川にいるだろう？」
もう雨は上がっているといっても良いほどの、もうほとんど感じない霧吹きのような小雨の弱い夜に、泳魚はそう言った。雨上がりの月の明かりも雲の上に淡くあるだけの、暗闇の空。そんなに風もない静かなこういう夜に蛍は舞う。
「蛍？」
飛鳥は急な申し出に聞き返してしまう。しかし、返事を待たずに泳魚は歩き始めていた。
「あぁ、兄ちゃん！」
河原の石たちが闇に湿って、かすかに輝いている。昼ならば苦もなく歩ける慣れた河原も、灯りの少ない夜には歩きづらい。雨露の涼気に混じり、不思議な霊気を肌に感じる。川の流れは穏やかで、月か何かが出ていれば、黒いシルクのように滑らかな色を乗せ凪いでいるだろう。今は蛍の灯りだけが、水面に淡くその光の筋を映している。
「あそこに、たくさんいるね」
泳魚は言う。彼の闇に消えてしまいそうな透き通った肌は、淡くラピスラズリの色に染まる。蛍光りの点滅にあわせるように揺らぐ泳魚の影。彼は無言のまま、さらに蛍の飛び交う闇のほうへ歩き出した。
「待ってよ」
飛鳥は慌てて追いかけ、白く細い腕をつかみ引き止めた。湿気た夜の空気に、草木の露に濡れた手は冷えている。まるで温かみを感じない肌である。しかし、飛鳥はこのひんやりとした体温に、安堵する。飛鳥はぎゅっと力をこめる。その手、指、体温、全てがそこにある。
「どうした？」

泳魚は、いつものように微笑んでいるだけだった。
「待ってよ」
飛鳥はもう一度言う。
そう、声をかけなければ、呼び止めなければ、このまま蛍と一緒にどこかへ言ってしまうような気がしたのだ。泳魚は飛鳥の握っていない方の手で、そっと飛鳥の頭をなでた。
「飛鳥……」
蛍火は緩やかに羽ばたきは、いつまでも瑠璃色の粉を散らしていた。

「あいつは、いつだって、飛鳥には甘いんだ」
ハクアは少し離れた家の生垣の上に座り、河原にいる飛鳥と泳魚の様子を見ていた。夜の闇の中でもハクアの目は関係なくよく見える。
「気楽なものだな、飛鳥は」
河原で無邪気に蛍を追う飛鳥を見て、目を細める。
「迷い込んだ、魂の煌き、か……」
眼前で舞うものたちを、ハクアは目で追いかけた。妖しい光を湛え短い命たちが彷徨っている。
ハクアは白い尾を群れにそっと差し出した。白い毛並みが、灯りで透けるほどに白く浮かび上がる。一匹、また一匹と、蛍は優雅に円を描きながら飛び交い、星のように空を囲みこんだ。
「あの雨男。奴がいる限り、この雲は晴れない」
蛍の星が照らす空、雨は止んでいる様だが暗く沈んだ雲が厚く、未練がましくそこにとどまっている。
雲はまだ厚いが、その綻びが見え始めていた。ハクアの目にはそれが見て取れた。
「長い夏も、この揺らぐ空も、そろそろ終わりだ」
ハクアは、尻尾にとまっている蛍たちに語りかける。
「さぁ、在るべきところへ早くお帰り」

明滅する蛍の光り、水に映る揺らいだ灯りは、煌々と光の残像を残し宵の口が迫る川の向こうへと、ゆっくりと列を成していく。蛍たちはその暗がりの中へ、吸い込まれるように風景の中へと消えていく。

## 八・彼は魚、水に棲む魚。白いその雫は金魚の夢。

彼の地に続く、頭上には、銀色の流れ。
はかない色の中に、赤い魚が、一匹、舞っている。
魚影がつくりだした揺らぎは、木目のように円を描き、水中をかき乱す。

水の外に、人間の顔がゆれていた。手を伸ばすその人影。
にっこり微笑む、見覚えのある、その顔。
棲んでいる魚は、水面を揺らす。その顔を見ようとすればするほど。
むなしく、揺れる水面。
魚の作り出す淡い色の波紋で、顔が壊れる。

白く細い指だけが浮かんでいる。
いつまでもそこにある。救いの手だけは、どんな揺らぎの何の影響も受けていない。
「……」
その人物の名を呼ぶ。
のばした指の先、赤い魚の影が、また、綺麗に舞っている。
雫が、水面で跳ねた。
はじけ、小さな冠ができ、小さな輪が広がりながら消えていく。

金色の魚が、泳いでいる。泳いで……水と同化し溶解していく……
魚、あの、あかい魚、泳いで……薄れる意識の中、青い闇に全てが溶けていく。
のばした手の先。それをつかもうとする小さな指先は、何も無い空間をつかむ。
夢。

## 九・消え行く泡のような

甘い匂い水の匂いが漂って……雨音は囁くように軒を飛び跳ねている。

飛鳥は目をひらいた。外からの薄明るい光が、滴り落ちそうな水の煌きとなって、ゆらゆらと天井に光の影を浮かべている。天井の木目の流れ、一様ではない節穴の波紋が、それと重なり、夢の続きのような色を作り出している。

目覚めてはいるのだが、手足に力が入らない。このまま再び夢という深いまどろみの中に沈みそうだ。

「あの時僕を助けてくれたのは、誰なのだろう?」

見覚えのあるような、あの彼の影。もううっすらとしか記憶の無い幼少の出来事、河原で遊んでいた時、水に足を取られておぼれた時の記憶。今では彼の濡れて冷えた肌のぬくもりだけが、感触として残っている。

飛鳥は寝返りをうち隣を見た。隣では泳魚が眠っているはずであったが、彼の姿は無い。何も無い畳の床が、そこにあった。泳魚はもう起きたのだろうか。起きるのは、やはり早い。泳魚が起きている、それだけで、このまどろみから起きられるような気がした。少しでも長く一緒にいたいという、恋にも似た感情が、湧き上がり意識にかかった雲を掃う。彼の気配はそれを充分に成してくれる。

飛鳥はなんとか布団から出て、居間へと向かった。朝も早いせいか、廊下には人の気配がしなかった。その静かな廊下を歩く。飛鳥は居間の戸を開け、中をのぞいてみた。カーテンの閉まった今は薄暗く、そこに満ちる空気は肌にまとわりつく。

「あれ、いない」

いつもならば、そこに座っていてぼんやりしているはずである。しかし居間をいくら見回してみても、泳魚の姿は無かった。

ふと居間にあるテレビが目に入る。岩のように黒いブラウン管のテレビ。この消えているテレビを、今つければ、何が映し出されるだろう。飛鳥の望むものは、きっと何も映らない。

「どこにいるんだろう？」

その時、部屋の隅で水の跳ねる音がした。水面近くを泳いでいた金魚が、人の気配を察して水をはじいたために、水が舞ったのだ。金魚は今日も変わらず赤く美しいその鱗を、水中で揺らしている。

「君は、今日も元気だね」

飛鳥は水槽に近づき、赤い鱗の小さな魚にそうっと語りかけた。

「兄ちゃん、どこに行ったか。知っていてもしゃべれないよね」

金魚は変わらず大きな目で、どこを見ているのか分からない視線であたりを見回している。

飛鳥はため息をつく。これといって用事があるわけではないのだが、姿が見えないということに多少の不安を感じてしまう。

「ハクアに金魚のフンのようだって、言われたっけな」

ハクアに言われたことを思い出し、泳魚にべったりな飛鳥は「確かに」と思い、苦笑いをする。

「ちょっとそこら辺に、探しに行こうかな」

飛鳥は居間を出ることにした。

飛鳥は居間から出て家中を探した。しかし、どこへ行っても泳魚の姿は無かった。飛鳥の家は旅館なので、もしかしたらどこかで行き違いになった可能性も考えたが、旅館とはいえこうも見つけられないのはおかしかった。

「もしかしたら、外にいるのかもしれない」

飛鳥はふと思い立って玄関へ向かう。すると泳魚の靴はなかった。つまり家の中にはいないようなのだ。

「こんな朝早くに。雨の中、兄ちゃんはどこへでかけたのだろう」

そう思いながらも、飛鳥は玄関の鍵を開けて外へ出てみた。雨の降る庭や商店街へ向かう道路を軽く見渡してみたが、泳魚はいなか

った。
「本当に、どこへ行ったのだろう」
家の中へ入ろうと再び玄関に手をかけた時、飛鳥は違和感を感じた。
「さっき、ぼく、玄関の鍵を開けて外に出た」
この扉は一応関係者以外立ち入り禁止の玄関で、鍵は常にかかっている。だから鍵がかかっていることに、最初は違和感を感じなかった。飛鳥はここの鍵を持っている。外に出た後、鍵をかけるためだ。しかし泳魚は鍵を持っていない。つまり泳魚は外に出たあと、ここの鍵を閉められないのだ。ここの戸に鍵がかかっていた以上、泳魚はこの玄関から出ていない。それは泳魚は外にもいない可能性があるということになる。
もしかしたら窓から落縁(おちえん)へ出て外に出たのかもしれないが、わざわざ靴を持っていってそこから出て行くという、そんな面倒なことをする理由が分からない。
飛鳥はため息をついた。
「本当にどこへ行ったのだろう」
家の中にいるのか、もしくは外へ出たのか、泳魚がどこにいるのかまったく分からなかった。それらがわかる痕跡はどこにも無かった。

誰かに聞けば知っているかもしれない。飛鳥はそう思い厨房の方へ向かう。そこにならば誰かはいるはずである。飛鳥は厨房を覗き込んだ。中では何人かの人が、休むことなく朝食の準備をしていた。
「飛鳥ちゃん、今日は朝早いね」
厨房の入り口で作業をしていた女性が話しかけてきた。飛鳥よりも七つか八つくらい年上くらいの、従業員の中では一番若い人である。
「何か探しているの？」
「兄ちゃんどこへ行ったか知らない？　どこを探してもいないんだ」

「お兄さん？」
その言葉は、兄という存在自体に疑問がかけられているそんな違和感を感じた。
「その人、飛鳥ちゃんのお友達？」
「違うよ、ボクの従兄弟だよ」
「従兄弟ねぇ」
首をかしげ飛鳥の言葉を繰り返す。
「見なかった？」
「飛鳥ちゃんに、従兄弟なんていたかしら」
「……」
飛鳥は彼女が冗談で言っていると思った。
「私は分からないわ。ごめんね。役に立てなくて。今は忙しいから、またあとでね」
そう言って厨房の奥へ去っていく。

「うそだ」
あの人が泳魚の事を知らないはずが無かった。彼女が何かと泳魚を気にかけていた事を飛鳥は知っていた。飛鳥と泳魚が滝に行く時、泳魚は弁当を作ってきたが、それを一緒に作ったはずなのだ。それを彼女が嬉しそうに話していたのを、飛鳥は知っている。それどころか今恋人がいるのかどうか聞いてきて欲しいと、飛鳥に頼んできたほどなのだ。泳魚の事を知らないはずがなかった。
「うそだ、うそだ、うそだ」
飛鳥は廊下を駆け、自分の部屋の戸を開ける。
起きた時は気がつかなかったのだが、部屋にあるのは飛鳥が眠っていた布団が一組だけであった。本当ならば、たたまれた布団がそこにあるはずである。しかし畳の床が見えるだけで、隣にあるはずの泳魚の布団は見当たらなかった。
なんでだ？　なんで……だ？

？？心の中でこだまする。

どこにもない泳魚の気配、何一つ残っていない泳魚のいたという痕跡、泳魚の存在が消えている。消えてしまった。

## 十・幻に流離う者は

ハクアなら知っているかもしれない。そう思い立ち飛鳥は傘をさして、ハクアのいる場所へ向かう。そこは昔、白い狐が人々に示したといういわれがある温泉がある。有名な場所であるが、朝が早いと人の気配がないことが多い。

覆うように常に湯気がたち、視界を狭め、その間から窺うように見える景色をも、うっすらと白で染めている。その世界の先にあるのは、現実の世界に似せた、もしかすると異界と呼ばれる場所なのかもしれない、そのような雰囲気を漂わせていた。

飛鳥は慣れた様子でその微かに匂う温かな水蒸気をかき分けて、その奥にある庭へ向かう。岩陰に小さくある祠の前で飛鳥はそっと呼ぶ。

「ハクア、いる？」

庭に建つ木と石でできたこの小さな古い祠は、ハクアの住処と言うのか寝床なのだ。

「ハクア、ハクア！」

何度も名前を呼ぶ。

「そんなに、何度も呼ばなくても聞こえている」

木の祠の暗がりから出てくる冷えた霊気は大気に散っている。その不思議な白い霞は一カ所にあつまり、不定形でいびつな造形を作っていく。そしてそれは、風にそよぐ柔らかな毛並み、濡れた石のようにつややかな瞳の形になっていく。

「探したんだけれど、兄ちゃんがどこにもいないんだ」

飛鳥はハクアに説明した。泳魚の姿がどこにも無いことを。思い当たるところは探したけれども、見つからなかったこと、そして誰も泳魚のことを覚えていなかったことを。

「そうか、よかったな」

ハクアはどこか興味なさげで、前脚を舐めひげを整えている。

「まさか、ハクアまで知らないって言うんじゃないよね？」
「そんなことはない。しっかりえているさ。人間たちと違って、どんなことも忘れることは無いんだ。だから、やつはもういない。それで良いじゃないか」
「どういうこと？」
「……」
その質問に、ハクアは口を開かない。
「ねぇ、ハクアってば！　ハクアは、兄ちゃんがどこへ行ったのか、分かるの？」
「あいつのことは、忘れろ」
どういうことなのかいくら問いただしても、黙ったまま何かを考えるように目をつぶっているだけであった。

「どうしても知りたいのか？」
やっと口を開いたものの、ハクアはやはりあまり乗り気ではないようだ。
「知っているんだね！」
「……」
ハクアは再び黙り込む。
「ねぇ、ハクア？」
飛鳥はじれったいと思った。どうして、こうもあやふやな態度をとるのだろう。もしかするとハクアにも泳魚の場所が分からないのではないかと心配になった時、ようやくハクアが口を開いた。
「やつは、もう向こう岸に……いや、まだ向こうの方に微かにいるな」
「向こうって？」
「向こうは、向こうだ」
ハクアは意味の分からないことを言う。どちらにしろ向こうにいるのならば、教えてもらいたかった。
「すぐに行こう。連れて行ってよ」

「……」
「どうしたの？　はやく連れて行ってよ」
しかし、ハクアは動こうとしない。何をためらうというのだろうか。
「どんな真実が待っていようと、飛鳥はそれを認めることが出来るか？　信じられるか？」
ハクアは真剣な口調で、言う。
「……？」
「どうなんだ、覚悟は出来るのか？」
「覚悟？」
ハクアはしつこいくらい、本当に良いのかどうか訊ねてくる。
大げさな表現であるとは感じているが、一体何が待っているのだろう。それなりの心の準備が必要らしい。
「大丈夫、僕は受け入れる」
たとえ何が待っていようとも、飛鳥は進むことにしたのだ。
「あぁ、そう言うと思ったよ」
ハクアはため息をつきながらも、自分の住処から出た。
「どうなっても、知らないぞ」

ハクアの足は裏庭に向かっていた。裏庭からは河原に出ることが出来る。昨夜この道を通って、蛍を見に行ったのだ。曇り空で朝早い時間の薄暗さとはいえ、夜の暗さよりは、はるかに明るく隅々まで見える。
「あとは自分の目で、耳で、探すんだな」
ハクアにそう言われ、飛鳥は見渡してみるが、しかし人の気配はしなかった。人があまり寄り付かないその場所は、寂しさに満ち溢れていた。
「本当にいるのかな？」
「まずはよく視てみろ」
ハクアは諭すように、飛鳥にもっとよく見るように促した。

飛鳥は仕方なく、もう一度よく庭を見回した。細かい雨の粒が、岩にあたって白い靄が、温泉の湯気のように、視界を狭めている。
「……水の音？」
どこからともなく聞こえてくるその水声に、飛鳥の心臓が、とくんと、力強く鳴る。
「やっぱり、向こうから水の音がする」
湿った空気が木々の茂みを揺らし、雨に打たれて、水滴を滴らせている。風に雫が散り、白い砂利もコケの少し生えた黒い大きな石も、濡れて煌々としているだけであった。
「行ってみよう」
濡れた庭石を駆け、小さな水滴の宝石で飾られた垣根を抜けて、河原へと続く道へ出る。木々の合間から見える川の流れは穏やかで、鏡のように平らで金属的だった。太陽の光がなくとも、そこにはガラスの破片が輝くように乱反射していた。湿ったような厚い空気の流れ、のどの渇き。そこには存在しない嫌な感情だけを残して、ぼんやりとのど元に、しこりのようにそこにあった。

空には雲、山は緑に覆われて、土の地面も木で出来た建物もいつもと変わらずそこにある。緑に覆われた谷間から立ち上る霞や、木々の合間からから見える空は、水墨画の世界のような霧吹きで造ったような白が漂っていた。木々の隙間から見える山間の町は灰色の雲に照らされて、同じ色に輝いているだけで、夏の湿った空気は雨の匂いを運び、草花から滴る甘い朝露の匂いがたち籠めていたのだ。
忘れかけていた記憶が、昔の記憶が、景色がうっすらと脳裏に映っているような気がした。川から吹いてくる水気の含んだ空気に、硝子のように透明な流れが肌に伝わり、飛鳥はそう思った。人気のない通りに、飛鳥は不安になりハクアの方を振り返る。
「なんだ？　帰りたくなったのか？」
からかうように、笑みを浮かべた。
「ちがうよ」

「だろうな。何のことはない。ここは単なる河原への道だ」
しかし、飛鳥は戸惑っている。見える景色は、いつもと変わらない光景である。しかし、自然も、建物も、風も、空気も、匂いも、時間も、全てのものの息吹が、あのどんよりとした空のように、重く深く停滞している。それらから漂う気配は、単なる無機物、単なる造形物（オブジェ）でしかないように、葉々のざわめく風のまにまにに満ちていたのだ。
飛鳥は一歩も動き出せず、ただ傘にあたる細やかな雨粒の弾けたその音色、夏の水気を帯びた風の渦に立ち尽くしていた。

どれほどそうしていただろうか。視界の端で何かが動いたような気がして、飛鳥は目を細めた。川の対岸に何かいるようなのだ。河原の木の陰、暗がりの下にぼんやりと立っている人影を見つめた。それは見覚えのある後姿だった。
「あ！　兄ちゃん」
遠くにあるその姿は、はっきりと捕らえることができた。
「そこにいたんだね」
飛鳥は手を振る。しかし、泳魚は気がついていないのだろうか。ただ川の流れを見ているだけであった。
「今から、そっちへ行くから」
飛鳥は川の淵に立って、水の流れを見た。透明な水は穏やかで、底の丸みを帯びた石は、深い緑色を生やし揺れていた。
「これなら、いけるかもしれない」
「あんまり無理はするなよ」
ハクアは心配そうに声をかける。
「大丈夫、ボクはもう平気だから」
飛鳥は意を決し足を一歩、川に入れる。冷たい流れは、一瞬、飛鳥の心に昔のおぼれた記憶をかすめたが、すぐに水は柔らかに飛鳥の足を包み込み、記憶の奥深くに流れ落ちていった。
飛鳥はさらにもう一歩進む。浅いとはいえ、流れる水の中歩くの

はうまくいかない。飛鳥はぬめった石に足をとられ、体制を崩してしまった。飛鳥は思わず、手にしていた傘を離してしまう。手元を離れた傘は、あっという間に、水の流れに乗って向こうの方へ流されてしまった。「あっ」と思い、傘を追いかけようとしたが、不安定な石に足を滑らせ、ついにしりもちをついてしまった。水の飛沫が散る音は鮮明に、あたりに響いた。

「これは、また数歩も行かないうちに、派手に転んだな」

ハクアは飛鳥の頭上から声をかけた。

「ボクは……大丈夫だよ」

「ん？　飛鳥が派手に転んだものだから、奴が気がついたみたいだぞ？」

ハクアにそう言われ、飛鳥は泳魚の方を見る。飛鳥と泳魚の目が合った。光を反射した、水の揺らめきで染まった、彼の顔は微笑んでいた。泳魚の瞳は瞬き一つせずに、飛鳥を見つめている。

「……飛鳥？」泳魚の唇が、小さくそう動いたように見えた。

「あ、兄ちゃん！」

びしょ濡れになりながらも、飛鳥は立ち上がる。

「そこで、何していたの？」そう尋ねた。

しかし、泳魚はその質問に答えなかった。泳魚は何も言わず優しく微笑んでいた。彼のその笑みは、変わらず優しかった。彼の笑顔はいつもと変わっているはずが無い。

「あれは、兄ちゃん、だよね？」

山からの静かな流れは、雨に揺らめき、その輝くモノたちから生まれた、夏色の結晶が揺らいでいる世界は、水の中のように見えた。

「こっちへおいで……飛鳥」

飛鳥の耳に、泳魚の響くような声がはっきりと聞こえてきた。飛鳥は向こうへ行こうとするが、足は動かない。流れる水の中で凍ってしまったかのように、すくんでいる。

「いや、オレの方から、そっちへ行こう」

泳魚が川を歩くたびに、水面(みなも)は揺れて、飛沫(ひまつ)の透き通った声音(こわね)が、氷雨(ひさめ)と響きあう。鈴を振るような声は、水声に溶けて、水泡(みなわ)に帰っていく。泡沫(うたかた)の雨は、まだ降りやまない。垂れ込めた雲から、大地の全てを濡らすように。

「……」

飛鳥は川を歩く泳魚をただ見つめていた。泳魚の、その無表情な笑顔をただただ、見つめていることしかできなかった。

「どうして、ここへ来たんだ」

泳魚は、その柔らかな気配を纏わせたまま、優しく問う。

「だって、朝起きたら兄ちゃんが、いなくて……それに、誰も、知らなくて」

飛鳥はうまく言葉に出来ないでいた。

「だから、ハクアに」

かろうじて、もう一言絞り出すように漏らす。

「飛鳥がどうしても、と言うからな」

飛鳥と目が合ったハクアは、助け舟を出す。

「ハクアは、飛鳥には甘いんだな」

泳魚は苦笑いをする。

「お前にだけは、言われたくはない」

ハクアはにわかに顔を横にそむけた。ハクアと泳魚のそのやり取りは、いつも通りで仲が悪いようでいて、どこか許しあっている雰囲気を漂わせていた。

「来てしまったものは、仕方ないな」

泳魚はため息をついて、どうしたものかと腕を組んだ。いつもと変わらないその少し冷めたような泳魚の笑顔に、飛鳥はすっかり安心した。雨に憂いた川の緩やかな水の反射が、泳魚がもともと持っていた影のある雰囲気と混ざって、さらに蒼く翳りに揺れたのだろう。飛鳥はそう思った。

泳魚はしばらく考え込んでいたが、何かを決意したように頷いた。
「飛鳥。君に大切な話があるんだ」と、急に改まる。
そして、飛鳥の肩にそっと手を添えて、澄んだ響きを持った声で囁いた。
「この何もかも映し出す水鏡は、真実を見せてくれる……」
泳魚は静かに言い、川の流れをその瞳に映し出した。川は揺らぎに染まり、泳魚の白い肌も、さらに蒼白に揺れ、そよいでいた。
「飛鳥も見てごらん。水の鏡は、何を映し出すと思う？」
最初、飛鳥は気が進まなかったのだが、泳魚の口から発せられるその言葉は、妙に心地よく、まるで魔法にかかったかのように、心の中に引っかかっていた氷を解いていく。言われるがままに、緩やかに流れる水面を覗きこんだ。
「その水に、映るのは何だろう？」
水面に自分の顔が揺れている。何の変哲もない普通の流れだ。揺らぎ一つ無い水面に、空や木の影が明瞭に映って見える様子は、まるで鏡のようで。空と樹と地面の境界線は鮮麗に、空は雲に覆われて、揺らいでいた。水鏡に映る景色は、別世界のように幻想的で、木々は鮮明な緑をたたえ、鮮彩にありのままの姿でそこにある。
しかし、飛鳥はその風景に違和感を感じた。そこには一人分の影しかその中に、揺らいでいなかった。
「あれ？　おかしいよ？」
飛鳥は泳魚のほうを見た。無表情であった彼の目が、はじめて感情に乱れたようすで、揺れ動いたように見えた。
「オレは存在していない……これは、真実だ」
かすかに震える唇は、確かにこう言ったのだ。
「そう……オレは、もともと存在していない。それが真実だ」
機械的に、繰り返した。
「で、でも、そこに……」
予想外の事態に、どうしてよいか分からず、飛鳥は動揺していた。
「それは飛鳥だから。まだ視えるんだ」

ハクアが、そう付け加える。
「まだ、視える？」
ハクアの言葉を、心ここにあらずといった虚ろな様子のまま、口の奥で何度か繰り返しつぶやいていた。
「ハクアの言う通り、飛鳥以外の人間には、もう感知されない。記憶さえも消えている。そして、もうすぐ飛鳥の目にも映らなくなる。飛鳥の記憶からも消えてなくなってしまうんだ」
泳魚はまだうつむいていた。水たまりに映った飛鳥を見つめながら、泳魚は小さくそう言った。
「どうして？」
飛鳥は、泳魚の存在を確かめるように、飛鳥は泳魚の腕をつかむ。泳魚の細い体が、びくりと動く。雨に濡れた冷たい腕からは、ぬくもりは感じることはできなかった。しかし、確かにそこに存在していた。
「オレは……」泳魚は黙ったまま、顔を上げ、飛鳥を見つめていた。
「このまま、ここには居れないんだ」
「だから、どうしてさ」
泳魚は飛鳥のその質問には答えず、泳魚は無言のまま飛鳥に背を向けた。泳魚は黙ったまま、ただ虚（そら）を見つめている。
「黙っていちゃ、わからないよ」
「消えてしまっても、オレは、飛鳥を見守っているから」
少しの沈黙のあと、泳魚は消えいりそうな声でそう言った。
「理由になっていないよ」
要領を得ない泳魚の回答に、飛鳥は彼の腕を強く握り締めた。泳魚は少し顔をゆがめたが、すぐに笑むだけであった。降り注ぐ雨、黒い髪から滴る雫が、頬を伝っていくのが見えた。雨粒に濡れた草は、水の色に香っていた。
「本当ならば、死んだ魂は、こんなにも長くとどまっていてはいけないんだ」
視線は飛鳥のほうに向けているのだが、意識がここにないといっ

たように、独り言のように誰に聞かせるでもなく、泳魚はそう言った。
「死んだ？」
そこに佇む泳魚の姿が風に揺らいで、景色に溶けたように見えた。肉体の器に収まらなくなった魂は、もうその時をただ待っているだけなのだ。
「ごめんな、飛鳥」
泳魚も本当は、飛鳥と離れたくなかった。
「でも、そろそろ時間なんだ」
泳魚に与えられた時間は、夏のほんの数日間。現と夢の境界があやふやになる盆の期間だけであった。少しでも、少しだけでも、一緒に過ごしたかったのだ。たとえそれが、幻の記憶なったとしても。
「うそだ」
飛鳥は後ずさりする。
「そんなの、うそ、だ」
後ずさった飛鳥の足元の石が、コトリと滑り落ちる。崩れる石、流れる深間に足をとられ、飛鳥はおもわずよろめいた。
「飛鳥！」
泳魚は手を伸ばすが、それはとどかず飛鳥は川の淵にはまってしまった。
「飛鳥！」
泳魚が再び叫ぶ。飛鳥の耳には、その声がとても遠くに聞こえた。
水の流れる音は木々の揺れる囁きとなり、時が刻む静寂の空間を作り出す。天から滴る雫は、その下に広がる深い藍（あお）の中へしみこむ。天から降り注ぐ水は地へ流れ出て、すべてを満たし、再び天へ還る循環。その水面（みなも）は、すべてを映し出す、鏡。水は、母なる生命の液（ス）体（ーブ）。その中で彼らは眠る――夢を見る。
その透明な液体の中を、珠玉のように鮮やかな紅に染まる魚が、泳いでいた。

## 十一・泳ぐ魚と飛ぶ鳥の憧憬

「あぁ、流されていく、沈んでいく」
泳ぐ気力さえ沸いてこない、抵抗のない空気のような水の流れ。
ぐったりと力の入らない手足。しかし、それは些細なこと。
魚のように、水の中にある心地よさが意識を奪う。
とうめいな空気の泡が、口から吐き出され世界を覆う。

「これは夢だろうか？　それとも現実だろうか？」
飛鳥の意識は、青に溶けていく。
ぶつかる気泡の粒に、身をゆだね空を見る。
鳥がその翼を水に透かしている。
のこるのは、いつか聞いた泡沫（うたかた）の囁き唄だけ。

「あぁ、あかい魚が見える」
憧れる空の風景。その泡沫が、崩壊の音を引き連れて。
憬れる水の情景。その水面が、揺れて、赤い魚の影を落とす。

「あの日、あの夏の日も、ボクは、金魚を見たような気がする」

## 十二・赤い雫の魚は出会い

飛鳥は、塗装のされていない土の道を走っていた。手にはお気に入りの小さな合成樹脂（プラスチック）で出来た玩具の水桶（バケツ）を持って。

道は夏の日差しのせいで、水分を失い硬くなってしまっている。整備された地面とは違い、足跡があちらこちらに残っていた。それは飛鳥の足よりも幾分か大きな靴跡だ。数日前に雨が降ったときに誰かが歩いて出来た物なのだろう、足跡のふちは少し風化して滑らかに土の地面と同化していっている。その靴底の模様が、かつて滅んでしまった太古の生物の化石ように見えた。その乾いた足跡は、向こうの川へ続いている。飛鳥はその足跡に自分の足を重ねながら、跳ねて駆けていく。

川に着くと飛鳥は水面を覗いた。太陽の光に照らされて、曇りのない硝子のように淡々と透き通っている。飛鳥は川の底まで良く見えるその水を、水桶に汲んだ。そして飽きることなく、小さな水面に映る、移り変わる光彩を眺めていた。

この揺らめく硝子は確かに澄んでいて綺麗だ。しかし、美しく見える硝子の破片はとても鋭い。触れれば柔らかい子供の指などすぐに切れて、赤い血が滲み出てしまうにちがいない。そして、このきらめきで切れて流れた赤い血は、川の水と混じってすぐに見えなくなってしまうだろう。

飛鳥は硝子の破片をすくっては、指の間から滴る水にそれを思っていた。

ふと飛鳥が顔を上げると、太陽の日差しを遮る岩の陰に、鮮やかな赤い流れがあるのを見た。鮮やかな血のようなその流れは、水に馴染んでいない。まるで紅玉で出来たような明瞭な色が、水の中にあった。

「あかい、さかながいる」

どこかの家から逃げてきたのだろうか、岩陰に金魚がそこに泳い

でいた。夏の暑い日ざしのなかで、魚の赤い鱗は涼しげにそこに揺らめいている。
この手で、その魚を捕まえてみたい。飛鳥はそう思った。子供だけで川に入ってはいけないと、大人からは言われていたのだが、その凍ったように煌めく鱗をつかみたい欲求に、すっかりその約束は抜け落ちてしまったのだ。
飛鳥は一歩、川に足を入れた。膝の下まで浸る冷たい川の流れが、夏の日差しで火照った肌に心地良い。音を立てないように歩こうとしたが、まだ幼い足取りは歩くたびに小さな白銀の飛沫を空に舞いあげてしまう。その音に魚が逃げてしまったのではないかと、岩の陰に目を向けてみたが、金魚はそこから動かないでいた。岩の暗がりに一匹揺らいでいるだけであった。
「こんなところで、ひとりは、さびしいから、おいでよ」
飛鳥は金魚に語りかけた。しかし、もちろん金魚は何の反応も示さない。その場を動かない金魚を、両の手でそっとすくってみた。飛鳥は思い描いていた。濡れた鱗を激しくくねらせ、捕まえようとするその小さな指の間を軽々とすり抜ける感触を、そして悠々と水の中に戻る映像を脳裏に浮かべていた。
捕まえられず何も無い手の平を想像していたのだが、予想に反して金魚は飛鳥の手の中に収まっている。しかしそれは決してその魚が弱っていると言うわけではなかった。金魚の尾が力強い様子で水を弾き、数滴の水が飛鳥の顔にかかったのである。金魚が元気な様子なので飛鳥は安心した。
「よかった、げんきみたい」
飛鳥は手の平にある赤い金魚を、ずっと見つめていた。
しかし、そうしている間に、飛鳥の手の平からはどんどん水が無くなっていく。ちいさな手の中では、水はそう長くはとどまっていることが出来ないのだ。いつしか手の平の水は無くなり、金魚は息苦しそうに口を何度も開けたり閉じたりしはじめた。
水の中でしか魚は生きられないことを、飛鳥は魚の図鑑を読んで

知っていた。なので金魚を一旦、水の中に戻そうかと考えた。この金魚を川に戻したら、金魚は遠くへ逃げてしまうだろうか。逃げてしまうのは悲しいが、飛鳥の手の上でこのまま死んでしまうのは、かわいそうだと飛鳥はそう思った。

飛鳥は決心し、金魚を川に静かに放した。金魚は川の本流へ向かうどころか、飛鳥の様子を見るように、ゆっくりと岩の陰から陰へと泳ぐだけであった。

飛鳥はすっかりその金魚が気に入ってしまった。

「ぼくは、あすかだよ」

飛鳥は名前を名乗る。

「いっしょに、あそぼう」

魚の鰭が動くと、水に映った自分の姿が歪む。飛鳥は、ただその金魚を追いかけていた。

誰もいない一人だけの川遊び。魚を追いかけるのに夢中の子供が、いつの間にか、川の深みの方へ向かっていることなど、誰も知るはずがない。飛鳥は一人で、その川へやってきたのだから。

その深い流れに捕まってしまったことなど、誰も気がつくはずがない。

泡に満たされた水に包まれて、伸ばした小さな指の先には、青く染まった空の揺らめきと、銀色に震える同心円の世界が、広がっている。いくらその水流をつかもうとしても、そこに、何もあるはずがなかった。

「みずのそらを、あかい、あかい、さかなが、およいでいる」

飛鳥の意識は、青に溶けていった。

## 十三・現世にかえろう、夏色の思い出にある夢へ

現(うつつ)の夢に飛沫をあげて浮かぶ泡は、全てを覆う崩壊の音を響かしている。

世界が、揺れる、壊れていく。

「あすか、早くこの手を！」

にわかに見える白い指。揺れている水沫(みなわ)の、水沫(すいまつ)の声音(こわね)でそう叫ぶ音。

「……だれ？」

「この手をつかむんだ、あすか」

帰らなくちゃ、向こうに。はっきりと響く声、飛鳥は手を伸ばす。

ろうろうと流離(さすらう)う景色に、差し伸べられる白い手だけが、そこにある。

うつろいそよぐ風景の中、指先を精一杯に伸ばし、その手をしっかりとつかむ。

「空へ還るその日まで、一緒にいよう。僕(オレ)の名前は、　　」

夏色に染まった世界が、涙のように震えている。

色白いその手を離さないように、飛鳥は握り締め彼の名前を呼ぶ。

のこる泡の軌跡は、鮮やかに世界に満ちて。

思い描いた夢のよう。昔見た碧瑠璃(へきるり)に映るあの夢のように。

いつまでも、心地いい暖かな流れの中に身を任せているわけにはいかない。

出口はもうすぐそこまで見えている。

「もしも、泡のように消えてしまっても、君は、悲しまないでいてくれるかな」

「よかった」

にっこり微笑む泳魚は、びしょ濡れの飛鳥にだきついた。
あの日も、彼はそんな顔でそこにいた。
るり色に染まる空は濃く、地上にもその色を落としている。
夢でいつも見ていたその影に、今、飛鳥は触れていた。

へだたる雨雲は既に無く、太陽が地上を照らし出していた。

## 十四・送り火に煌く

「あぁ、飛鳥。戻ってきて、よかった」
泳魚は、さらに飛鳥を強くだきしめた。
「兄ちゃん……」
泳魚の胸に顔をうずめながら、飛鳥は言う。
飛鳥はこの感触を知っていた。もっと幼い頃、感じた懐かしい、今もはっきりと残る、指の間に感じたあの感触だ。
「やっぱり、兄ちゃんだったんだね」
二人が一緒に過ごしてきた夏は短い、そして暮らした時間は長い。そのことを二人は語らずとも、感じ取っていた。
「でも、オレはもう行かなくてはならないんだ。わかってくれるかな？」
泳魚は、飛鳥の頭を優しくなでた。
「……うん」
飛鳥の瞳から、涙が雫となってあふれてくる。
「兄ちゃん、ありがとう」

あの空を覆っていた雲はどこへ流れていったのだろう、その青天井には濡れた日輪が、光に咲いていた。晴天の下、涼しく軽い風が、全てを包み込む。まだ少し雨の匂いを残した風は、泳魚の黒い髪を揺らしている。その風に誘われて、どこからともなく、白狐たちが集まりはじめた。小さな狐、大きな狐、太った狐、様々な狐が集い始める。狐たちは皆、ほのかに明るい提灯を持っていた。
「あぁ、もう、本当にさようならの時間だ」
泳魚を囲むように現れた白狐たちを見て、泳魚はそう言った。
「この狐たちは？」
何の前触れもなく突然現れた白狐たちに、飛鳥は戸惑いを隠せない。起こっている出来事に、辺りを見回している。

「これはハクアたち一族の仕事なんだよ。魂を、空へ送るんだ」
泳魚はそう説明する。
「いつまで経っても、空へ行こうとしない困った魂でも、仕事だからな」
ハクアもいつの間にか、他の狐たちと同じような提灯をその手に持っていた。揺らめくその火は、まるで蛍の火のように、淡い光を帯びてあおく燃えている。
「さぁ、さぁ、仕事だ仕事」
白い尾を空に向かって立て、ハクアがそう言った。
「飛鳥、これで本当のお別れだ」
泳魚は目を細め、飛鳥の頭に手を置き、名残惜しそうに優しくなでる。
「悲しまないで、全て消え去るわけじゃ、ない。オレはあの空へ行くんだから」
「分かっているよ」
一つ、また一つと、白狐たちの提灯は円を描きながら、空を舞う。青い焔の粉が、はらはらと落ちていく。明滅する蛍のように、その光彩は意思を持って舞い始める。泳魚の体はその微光に包まれて、大気に浮かんでいく。
泳魚は手の平をそっと差し出した。
「兄ちゃん」
飛鳥は駆け寄った。しかし、飛鳥にももうその泳魚の白い手に触れることはできなかった。彼のその手は、灯りに照らされて水晶のように透き通っていた。
「これからも、見守っているからね」泳魚は再び微笑む。
「うん」飛鳥はうなずいた。

飛鳥は空を見上げた。その空は晴れわたっていた。それなのに、空からは雨が降り注いでいる。それは、白狐たちが持つ灯火から漏れ出した碧い粉。それが、いつしか柔らかな水のつぶてになって、

地上に散り、満たしていく。
天気雨、そして通り雨。
静かに天空に舞う鱗の軌跡が、雨粒に照らされている。虹と言う名の奇跡が、太陽の光に輝いている。輝石の橋は、美しくも妖しい光彩陸離と染まった光を放つ。
狐たちの送り火が、夕焼けの迫る向うの空へとゆっくりと列を成し、人ならざるものを天へと導いていく。
生命は大地に還り、そして空で孵り、再び大地に帰る。その循環が繰り返されている。そして、ひとつの生命が、また空で初声（うぶごえ）を上げた。

『ありがとう、』

その声は、流れる空に、風に、うっすらと、残像を残し。
あの山の空に強く残る、虹のように。
明けた空気の中に、
そっと、

## 十五・そらの魚と、みずの鳥。

水たまりに月の光が射し込んでいる。気がつけば、視界に入る空はすっかり夜の色になっていた。

「アスカ」

名前を呼ばれた飛鳥は後ろを振り返る。

「こんな所で、どうしたんだい」

その質問に飛鳥は首を振りうつむいた。その飛鳥の視線の先にあったのは、丸みをおびた小さな白い石。裏庭の端の少し盛り上がった土の上に、その石が不自然に置いてあった。それは夏の初めに死んだ、金魚の墓である。

「一人かい」

一人。この言葉が妙に心に響く。

「……さっきまで、一緒だった」

「誰と一緒だったんだい」

飛鳥は、名前を言おうとした。しかし、のどの奥につかえて言葉が出てこない。飛鳥の口からは、彼の名前が発音できない。彼の名前は、どう発音するのか？

「……わからない」

飛鳥は庭の水たまりを見た。波紋ができなければ、水があるようには見えないほど、水は限りなく透明色に近かった。鎌のような月がにっと笑っている。水面に葉から滴る雫が触れると、月は揺らいだ。彼の名前は、波紋のせいで揺らいでいるように朧だった。

「白狐にでも幻を見せられたのかい？　お盆には不思議なことが起きるから」

「白狐はそんなことしないよ」

「そうだな、飛鳥と白狐は友達だものな」

飛鳥の頭をなでる。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか」

「うん」
ふたつの影は手をつなぎ、灯りのついた建物へと向かう。その道すがら、飛鳥は視界の端で、明々と白く輝く毛並みの狐を見た。その狐も飛鳥のほうを見つめ返す。この白い狐はこれからもずっと何事もなかったかのように、温泉を全てを見守っていくのだろう。

空はもうすっかり紺色で、銀色の月がまあるくあった。片隅で虫が涼しい声で唄い始めた。なんて悲しい歌なのだろう。その虫の唄は草木の揺れる音と共に風に乗って、夏の夜の匂いを残しつつも、秋の始まりを告げている。気がつかないうちに、しかし確実に季節は移り変わっていくのだ。

――その風に撫でられた白狐は毛並みでそれを感じ、いつものように空に浮かぶ月を、その風景を仰ぎ見ていた。

## あとがき・「夢」の始まりに、「言葉」を隠し、物語を育む。（前書き）

作中に　3回ある「～の夢」のタイトルの話には、ちょっとした仕掛けがあります。

『　「　』の行を除いた頭文字のみを読んでいくと……。

重要でもなんでもない単なる言葉遊び、「夢」の始まりに、「言葉」を隠し、物語を育む言葉（タイトル）です。

## あとがき・「夢」の始まりに、「言葉」を隠し、物語を育む。

「瀧の竜」と「温泉の白狐」の伝説は、実際に存在する場所の言い伝えをモチーフにしています。
子供のころは、夏になると、毎年のように、そこへ行っていました。

海の無い山奥の町。
河原には、球状の石灰質団塊（ノジュール）があって、それを割れば運がよければ、そこには眠る貝の化石たちを、見ることができました。まれではありますが、サメの歯を見つけることが出来ます。
水の囁く言葉をこっそりと聞いた、海が無い山奥の中にあっても感じる、大いなる海の気配。

その化石の眠っているの川の支川　の、少し上流にある瀧で行われていた夏のお祭り。
そこで出会う、もう顔も名前も忘れてしまった一夜限りの友達。
現世（うつしよ）か幻世（まぼろよ）か、それは子供の頃の思い出。
あの友達たちが、そこにいたという気配（かたち）だけは思い出せる、「彼の名」を呼んでいた事も覚えている。
でも、今はもう思い出せないその顔、それは口にできない忘れてしまった「名前」
それは、本当のことなのか、それとも、記憶の作り出したものなのか。
もう記憶の中にしか存在しない、幻の夏……

子供は大人と異なる世界に生きているのかもしれない。その子供の頃、今は忘れてしまった、この世のものではないものが住む世界を感じた事。

心の奥にある、無意識の記憶からそれぞれの夏の思い出を、どこかで見たような既視感、映像を、お届けできれば、と。
そういうのを、表現できていたら良いなと思っています。
最後まで読んで下さって、ありがとうございます。

＞ｉ５１５６―３１２＜
挿絵：２０１０年３月１０日撮影。

鏡のような。
この偽物のような水溜りに映るのは、
虚像の空と樹と地面の境界線。
空は、青くて、揺らいでいた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9792q/

白堊の魚、侏羅の鳥。

2011年7月22日03時41分発行